

昭和十六年十二月八日

いつもなら明石海峡越えに淡路島が望まれる高丸丘は、その日の朝、雲が低く垂れていた。

私は国鉄垂水駅で下車し、高丸丘の上に立つ神戸高商（現神戸商大）へ急いだ。その日は卒業試験の一日目であったので、校門を入りそのまま試験場に指定された三階の教室の方へ向かおうとした。しかし、校内は何故かざわめいており、学生達がぞろぞろと一階の教務課の方へ行くのを見て、不審に思いながらその後が続いた。皆の話ではラジオで何か重大ニュースが放送されるらしい。やがてボリュームを一杯上げた教務課のラジオから臨時ニュースのチャイムが流れた。

「臨時ニュースを申し上げます。臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部午前六時発表 帝国陸海軍部隊は本八日未明、西太平洋に於いてアメリカ、イギリスと戦闘状態に入れり」

日中戦争の推移、仏領印度支那への進駐、日独伊三国同盟の締結、そして米英蘭などの日本に対する制裁措置、日米国交調整の行き詰まり、国内的には軍部の独裁体制の強化等、最近の情勢から、何時かはこういう事態になるものと予想はしていたものの、卒業、入営を目前にした今、大戦に突入するニュースを聞くのは我々にとっては大きな衝撃だった。もう、どうしても避けて通れぬ運命にがっかりと捕まえられてしまったと云うのが実感だった。

やがてラジオ放送がおわり再び軍艦マーチが流れ出すと同時に学校配属将校の発声で「万歳」が唱和され、若者達の声は高丸丘周辺に届いた。茫然として我を忘れていた私は何か後ろめたい気持ちになったが、それを吹き飛ばすように大声で私もまた「万歳」を叫んだ。

思えば、この時点から日本は奈落の底へ転げ落ちる事になり、若者の多くは太平洋周辺の地にその若い命を落とす事になるのであるが、誰がそれを予測し得たであろうか。

当時の我々は、日本は戦えば必ず勝つ神国であると信じていた。日清・日露戦を僥倖に勝った奢りであったかも知れない。「万歳」を叫んだ学生達の多くは、ただ日本を愛し、日本を憂え、神国に背向ける者への膺懲を高らかに叫んだのであった。

十六年十二月——繰り上げ卒業

十七年 一月——就職

二月——歩兵第六連隊入隊（兵庫縣加古郡神野村）

従って昭和十七年の正月は、目まぐるしい境遇の変化のさ中に迎えた。

その頃、堺市の鳳町に住んでおり、元旦の朝は例年通り父・母・妹と家族揃って鳳神社に参拝し、その後祝膳で新年の挨拶を交わすのが習慣となっていた。

その年の正月も神社参拝後祝膳についたが、例年とは違い、誰の表情にも目の前に迫っている長男の入営に対する不安があった。場合によっては家族揃って迎える正月は、これが最後になるかも知れないという思いがあった。

母が傍に置いていた風呂敷包みを解きはじめた。師走の木枯らしの荒れる街角に立ち、道行く人々から一針つつ、弾避けの願いを縫い込んで貰った千人針の腹巻だった。

三日の朝は雑煮を食べ終わった暫く後に、剣道三段の父が「腹ごなしだ」と言って、私を近くの広場に連れだして剣道の稽古をつけてくれた。

やがて戦場に行く長男に対し、父もまた口には出さないが、母が武運長久を願う千人針を与える気持ちと同じであったに違いない。

今は既に無い父母ではあるが、もう一度会えたら礼を言いたい事が山程ある。

入営の日の朝、阪和電鉄鳳駅前広場は、見送りのため町中の人々が集まっていた。

「召されて参ります。男児の誉れこれに過ぐるものではありません。——」

型通りの挨拶をして、何百人かの「万歳」の声に送られて出発したのであった。

昭和十七年二月一日、歩兵第百六連隊機関銃中隊に配属された私は心身共にたくたくに疲れて初めて軍隊の藁布団の中に不安な夢を結んだ。

それからの約一年半の間は有名な日本軍隊の猛訓練と文字通り（しごき）の日々であった。

その厳しさは経験した者でないと到底理解する事は無理であり、九時の消燈ラツパがどれ程に嬉しく聞こえた事か。所が、我々幹部候補生の班にとってはその消燈ラツパさえ救いのラツパにならない夜が多かった。

コツ、コツ、靴音がする——古参下士官の班長が来るようだ——

「起床！」 やっと昼間の厳しさから解き放たれて眠りに落ち込もうとする頃合を見計っての事である。

「誰かがへまをやったんだな」観念して十二名の班員が寝台から飛び下りて、直立不動の姿勢でそれぞれ自分の寝台の前に立つ。

「貴様達たるんだ。そんなことで帝国陸軍の将校になれるとも思っておるのか！」とがなりたてるやいなやバンバンバン厚い皮製スリッパの裏が全員の頬に激しい音をたてる。その勢いと酷い痛さの為にぶっ倒れる者もいるし、まれには前歯を折る者も出る。何故撲られているのかはつきりわからない事もあったが、とにかく行事としての（しごき）が繰り返されるのだった。

幹部候補生に就いて若干付言すると、当時日本人は満二十才になると徴兵検査をうけて、兵役に耐え得る身体かどうかを判定し甲乙丙と格付けされる。そして情勢に応じて必要な人員の徴兵が行われ徴兵された新兵は普通二等兵という階級となり、襟か又は肩にある階級章に小さな星印が一つ付けられる。以後、成績に依って一二年毎に星の数が増え、二等兵から一等兵、上等兵、兵長と進級して行く仕組みになっているが、成績が悪くて何年たっても進級出来ない、所謂万年一等兵とか万年上等兵とか言われる髭づらの古参兵が兵営内にうろろし、それなりに威張っていた。これら一般徴兵による兵隊の上に、伍長、軍曹、曹長という下士官階級があり、更にその

上に將校階級があった。なお下士官及び將校は職業軍人であり、特に將校は士官学校卒業或いは陸軍大学卒業者である。

以上が普通のコースであるが、戦時になって大量の兵を徴兵して軍がふくれあがって来ると、正規の士官学校出の將校の数が不足するので、その補充策として職業軍人でない予備士官制度というものがある。それは高等教育を受けた一般新兵から將校となり得る資質を備えた者を試験で選拔し、特別班を作つて特に厳しい新兵教育をした後予備士官学校に入学させ、そこで徹底した將校教育を実施して見習士官と言う階級に任命し、再び元の部隊に帰隊させ或る一定期間の実績を観察後將校（少尉）に任官する制度である。この新兵から選拔されてから予備士官学校を卒業して見習士官に成るまでの教育期間中の者を幹部候補生と呼ぶ。

ところが、選拔されて幹部候補生の班に入つた途端に妙な現象が起きる。と言うのは候補生は現在星一つの二等兵であつても、一年もたないうちに將校待遇の見習士官に成る事が約束されているので、現在威張っている候補生班の班長や教育助手（下士官・兵）達もやがて直ぐに直立不動の姿勢で敬礼をしなくてはならない事を思うと面白からう筈がない。

教育にかこつけての（しごき）など候補生苛めが無かつたとも言いきれない。

しかし、私も軍人に成り切つてしまつた後には、こうした理不尽と思える厳しさも、ある程度止むを得ない事と考えるようになっていた。何十人か何百人の兵の命を預かつて戦場を駆け回るのであるから、其だけの精神力と技術が必要であり、学校を卒業したばかりのひ弱な男の性格を変えて、僅か一年間で鬼將校に育て上げるにはやむを得ない方法なのではなからうか。因みに、如何に厳しい教育をしたからと言っても全ての者が有能な將校に成るとも限らない。

こんな例がある。

某（ ）は幹部候補生から見習士官を経て少尉に任官、やがて小隊長となつて五十名程の部下を率いて中支戦線（中国）を転戦した。銃砲弾飛び交う非常な激戦で、彼の部隊は土手

の陰にへばり付いたまま身動きする事もできない。死傷者も次第に増えつつあり、このまま何時までもじっとしていると全滅の心配がある。彼は傍らの分隊長（軍曹）を振り返り「おい、どうしよう——」と尋ねた。これは戦闘中の隊長の言葉としては、部下の士気に影響する不用意な言葉だった。

「突撃なら突撃とキッパリと命令してください！ 小隊長が命令したら、いくら弾がとんで来ようとも飛び込んで行きますよ。「どうしよう」なんて言われると一ぺんに命が惜しくなって兵隊は動きませんよ。隊長に替わって自分が引っ張ってゆきます！」と言って分隊長は兵達を振り返り大声で、「（突撃）の号令を発した。

それからというものは小隊長の權威は全く地に落ち、実質上軍曹が指揮して危機を脱したのである。頼りない将校に率いられる部下はいくらに命を失い、これ程かわいそうな事はない。

とにかく私も、元隊と予備士官学校における厳しい教育に耐えねばならなかった。教育だからいくら厳しくても死ぬことは無いと思っていたら夏の阿蘇山周辺の演習では日射病の為に数名が死亡した。それよりも驚いたのは、予備士官学校でのあまりの厳しい訓練に耐え兼ねて脱走して行方不明になった者がいたが、それが事もあるうに九州の或る連隊の連隊長の息子だったと言われている。神野の元隊でも初年兵の脱走事件があり、我々が徹夜で探し回ったが見つかることが出来なかった。当時、徴兵忌避と脱走と言えば重大な犯罪であり、脱走兵は軍法会議で裁かれて重営倉に監禁される禁固刑に処せられたが、本人よりもその家族・親族が世間から蔑まれて、自殺するような事がよくた。勿論、戦地に於ける脱走者は銃殺である。

入営から将校になるまでの教育期間中、訓練の厳しさの他にもう一つ苦しめられた事がある。それは所持品の検査である。軍隊に於ける所持品といえば銃・剣或いは衣服類・鉢・洗濯たわし等々など殆ど官給品であるが、金銭その他若干の私物もある。官給品の員数と手入れ状態の検査がしばしば行われたが、缺一つでも無くそうものなら大変なことで、顔がひん曲がる程鉄拳制裁

を受ける。軍隊の官給品とは恐れ多くも天皇陛下からお預りしている物だと教え込まれていた。そこで妙な事が起こる。誰れかが缺を失うと軍隊に於ける生活の知恵で、慌てて他人の缺を失敬する。盗まれた者は又慌てて他人のを失敬する。所持品検査の前になると連隊中でこの盗み合いが繰り返され、最後に盗む時間が無かった者が検査をする下士官の生贄になるのである。

所が、入隊して日がたつと、妙なことに気が着いた。殺風景な軍隊社会の中でもお互いに助け合い、慰め合う人脈が同僚間、上下間に次第に出来上がってくるのである。缺を無くして困っていると、顔も知らない古年兵が来て「よし、俺に任しておけ」と言って都合してきて呉れた事があった。自分で盗まなくても替わりに都合してきて呉れ、私がほっとした顔を見ると、彼も満足そうである。厳しい階級統制の中で情に飢えている軍隊社会特有の現象であろう。面会日に来た母にその事を話すと母も非常に喜んで饅頭を届けて呉れたが、こういう古年兵が出現してからは何によらず困った時に大いに助かった。

しかし自分で盗む事も出来ず、誰れにも助けてもらわない者が決まって検査をする下士官から苛められていたように思う。こういう兵が思い悩んだあげく、よく脱走するそうである。言わば要領が悪いばかりに自分ばかりでなく家族まで破綻させることになるとは実に嫌な事である。私物についても、特に所持金額の検査がよくあった。当時、兵には軍隊から毎月五円の手当てが支給されており、所持金も五円以上の現金を持つ事は許されなかった。しかし二十才やそこらの若い元気な兵が毎日猛烈な訓練にあけくれているので、隊の食事だけではひもじさに耐え得られないので営内の酒保（売店）や、外出時に一般の店で使う金も五円では足りない場合がある。そこで故郷の家から別に送金してもらって、五円以上の余分の金を持つことがあるが、私物検査の時にその隠し場所に困るのである。ある時私は余分の金の五十銭銀貨数枚を大便所の仕切りの上に隠しておいた。一二週間の間その金も必要が無いのでそのままにしておいたが、やがてその金を取りに行つて仕切りの上に手をのばした時、不思議なことに五十銭銀貨の枚数が増えている

のである。一瞬怪訝に思ったがやがて理由を思いつき吹き出してしまった。誰の考える事も同じで、其処が一番手っ取り早く隠すことが出来て、しかも誰が隠したか犯人の判らない場所だからである。

とにかく厳しい演習と内務班に於ける苦勞の日々であったが、神野の元隊から熊本の予備士官学校に進み、いよいよ卒業も近づき、見習士官進級の試験が連日行われた。試験は学科と術科に分かれていたが、私の成績は順調に推移してひょっとしたら軍からの表彰を受けられるかもしれないと言うことを知らされた。

陸軍では毎年、全国の予備士官学校卒業生の優秀生数名に対して、陸軍大臣や教育總監が表彰する制度があった。私は、その時点で既に終っていた戦術等の学科試験がたまたま良かったので区隊長（予備士官学校内単位部隊の長）は区隊の名誉のためにも頑張れと言って、消燈後も特に区隊長室で勉強する事を許してくれた。が、結局賞は貰えなかった。

なお後日の話だが終戦の翌々年になって当時住んでいた大阪の住吉の家にこの区隊長が尋ねて来た。陸軍大学出の優秀な大尉だったが軍人を廃業して新しい職探しに九州から出て来たのであるが数日間私の家に寄寓した。

十七年十月卒業と同時に見習士官となり、兵庫県神野の元隊に戻った。

晴れて元隊の正門に入る時、衛兵所の衛兵達が大声で「敬礼！」と唱えながら総員起立し私に（捧げ銃）の礼をした。答礼して新兵で入隊した元の機関銃隊の方へ歩いて行く途中あちらからも、こちらからも敬礼を受ける。半年前迄は哀れな程小さくなっていた新兵が、今は金筋入りの階級章を付けて遅しく歩く。徹底した階級社会である。変な具合だが悪い気持ちではなかった。私を含めた十名の見習士官は一室を与えられ、軍隊生活の期間を通じて最も愉快な日々を過す事となった。やがて死地に飛び込んで行く日が確実に約束されてはいたけれども。

依然として演習は厳しかったが、もはや古年兵の（いびり）のような軍隊の陰湿な面から解放

されたのが物凄く嬉しかった。反動として軌道から外れた茶目っ氣もみられたが、二十才を少し過ぎたばかりの青年將校達のことだからやむをえなかった。同室の見習士官に酒造会社の社長の息子がいたが、外泊が許された日、家から酒粕をトランク一杯つめて持ち帰った。そしてその夜見習士官室で皆が焼いて食ったものだから酒粕の匂いが連隊中に漂って、週番士官が苦言を持ち込んできたが、週番士官とて同じ見習士官なので「おまえも食って行け、やいのやいの言うな」と追い返したりした。後日、同室十名の見習士官中半数が戦死したが、酒粕を持ち込んだと言う戦友は現在、酒造社長となっている。

やがて昭和十七年も終わりに十八年の正月を迎えようとしていた。見習士官には特に外泊が許されて自宅で正月が過ごせるらしい事がわかった。と同時に、近い内に戦地へ行くことになる我々への配慮であろうと推測されたが、そうした不安よりも家へ戻って正月を迎えられるという事が嬉しかった。

同じ年の二月、見送りの人達の前で入營の挨拶をした同じ故郷の駅に一人で降り立った。あれから一年も経ってはいないのであるが、もう何年も昔のように思える。あの時は学校を出たてのひ弱な青年だったが、今は真っ黒に日焼けした上に、体重も増えて逞しい青年將校の姿である。予め知らせる事が出来ずに突然家に帰着いたものだから、父母・妹達は私の姿を見て驚いた。やがて親戚・友人達も駆けつけてくれて賑やかになり、とりあえず一升瓶の栓が抜かれた。陽気になった友人が「俺にも一度その服を着させてくれ」といって軍服を着、軍刀まで着けて、はしやいでいた。

そのうち誰の顔にも、何故急に帰ってきたのか、戦地への動員命令を受けたのではないかと尋ねるのを控えている様子が見えてきた。軍の機密を尋ねる躊躇と、返答にたいする不安がそうさせているのである。

「何時戦地へ行くのか、それは私にもわからない。しかし多分ここ半年以内に違い無い」思っ

いる通りを言うと父母は僅かに安心した様であった。

僅かな外泊期間ではあったが童心に帰ったような和やかな気持ちになり、知恵文殊を祭る家原寺へ通じる畑の畦道を一人歩いたりした。その道は、学生の頃に単語カードを片手に何度も行き来した道である。

久し振りに懐かしい土の香を嗅ぎ故郷の空の空気を胸一杯に入れて、束の間の外泊から連隊に戻ると、間もなく連隊の編成替えが行われた。それまで一個班に集まっていた見習士官達は分解されて、私は士官学校出身の寺島中尉の中隊に教育係将校として配属された。

当時私達は軍人でありながら戦況の推移が全然わからなかった。しかし戦争がますます激しくなってきた。ある事は感じており、戦争の激しさに比例して私の仕事も忙しくなり徹夜することもあり、と言うのは次から次と現役の若い入隊兵や年をとった召集兵が入って来、三月間程みっちり教育訓練をし、それが終わると何処へともしれず動員されてゆく状態が繰り返されたからである。

練兵場は蓮華の花が咲き乱れる春の日だった。

新兵達がその一隅の叢の中にじっと伏せて私の言う事を聞いている。

「ボケーと日にあたって雲雀の声を聞いているんじゃないっ！よく前方のトーチカを見ろんだ、今からあのトーチカを攻撃する。発見されたらダダダッと機関銃弾が雨霰のように飛んできて、貴様達の命はそれで一卷の終わりだぞ、草の陰や窪みの中を這いながらじりじりと進んで行き、トーチカの近くに辿り着いたら其処で手榴弾を発火させ、五つ数える間にトーチカに飛びついて、それを銃眼から放り込むんだ。まごまごしていると敵の弾にやられるか、自分の手榴弾で体が吹っ飛んでしまう事になるぞ、今から何回も練習して全員が自信の付く迄やるからへばるなよ。よし、前から二人づつ決死隊だ、出発！——コラッ 何をしとる、もっと頭を下げて行かねば駄目だ、第一組二人共戦死、もう一度戻って遣り直し！」

明け暮れこういう事の繰り返しで、僅かの期間に教える事は山程あった。兵隊は苦しくても、国を護る心と、自分の命を守る気持ちから非常に真剣だった。トーチカ攻撃の演習がおわって、新兵達が私のまわりに輪になって座り、汗を拭きながら演習の反省をしている時に、或る新兵が言った。今でも覚えていて。まだ童顔の兵隊だった。

「教官殿、自信ができました。戦地へ行ったら絶対にやったるぞ！」あの顔が忘れられない。

そんな生易しいものではないのに——私の連隊からビルマ戦線へ出て行った者が多かったから其の兵隊も何処かで、想像も出来無い物量で装備された敵に囲まれて戦死し、遺骨も帰って来れなかったのではなからうか。

新兵教育も多忙だったが、部隊の総合演習も次第に頻繁になり連隊中に緊迫感が漲り出した。

兵庫県加古郡に在る我々第百六連隊は、近畿地方のあちらこちらに在る連隊と共に中部兵団を形成していたが、その統合演習が行われることもあった。深夜、突然非常呼召のラッパでたたき起こされ、慌ただしく武装して兵営前に整列するやいなやそのまま機関銃をかつぎ或いは歩兵砲大隊砲を牽きながら出発し、どんどん北の方へ行軍、山中に入るといろいろな敵状が設定されて激しい演習に入って行く。やがて激しい雨となり、約三十キロの完全軍装に雨が滲み通ってきてさらに重く身体にのしかかり、山中を歩くだけでも容易ではない。そして三日間昼夜をも分たぬ演習が繰り返される。夜中、二時間程の小休止となったが雨宿りをする場所さえ無い、それでも重装備を外すと寒くなって、禪まで濡れた身体ながら松の木に寄り掛かりがたがた震えながらも眠りに落ち込んでしまう。休止が無情にも終わると再び山を越え谷を渡り、行軍となって摩耶・六甲を経て武庫川上流付近の山麓で奈良の連隊と遭遇戦となった。畦道の陰に一時間程ひそかにへばり付いていたが、突撃準備が下令された。軍装の上、銃には着剣し、さらに防毒面をかぶり突撃号令を待つ。やがて夜がしらじらと明け始めて、物の形も漸くはっきりとし出した頃に突撃ラッパが鳴り響き、我々の部隊は銃剣を敵方に向けて一斉に突撃をはじめた。防毒面を着けてい

るので息をするのが苦しく死に物狂いで敵陣に飛び込んだ所で演習終了のラッパが鳴った。
完全に疲れ切って、目の前が真っ暗の状態であった。

予め計画されていた通り周辺の農家に分宿が命ぜられた。民宿は初めての経験であったが家族総出で「お国の為とは言いながらご苦労さまです」と挨拶を受け、腫れ上がった足を水で冷してもらい、心の籠もった朝食を戴だいた時は涙がこぼれる程の嬉しさだったが、その朝食の茶碗を持つたまま、うとうとと眠ってしまう有様だった。

梅雨に入った頃だった。

岡山県に在る日本原と言う広大な演習場で連隊独自の総合演習が行われ、その日も又激しい雨であったが、私はずぶ濡れになって機関銃を撃ち続けていた。その時、伝令が走り寄ってきた。「小林見習士官殿、中隊長が呼びであります。直ちに中隊長幕舎へ来るように言われました。終わり！」

幕舎を打つ雨音は激しく、幕舎の床を雨が流れている。その中で寺島中隊長が真剣な顔をして突っ立っていた。呼ばれたのは私だけではなく、他中隊長の　　と言う見習士官も来ていた。彼はたまたま神戸高商の同窓生であった。

「小林・　　両見習士官、貴様達二人のどちらかが某部隊に転属されて戦地へ行く事になった。普通なら二人から希望を聞く迄もない事ではあるが、いろいろな事情があるかも知れぬので貴様達の意見を聞くことにした。率直に言ってよろしい。」見習士官、都合はどうだ？」

先に聞かれた　見習士官は暫く口籠った後、「命令とあらば喜んで戦場へ行きますが、実は現在父が危篤の状態でありまして　　」その言葉も半ばに私は、無意識の中に叫んでいた。「自分が行きます！」

南海第四守備隊第一大隊本部に転属命令を受けたのは六月二十一日であった。

南海第四守備隊は占領した南太平洋諸島の防衛強化の為、中部軍各連隊から兵力を抽出して、

混成新設される独立守備隊であった。

世界各国から経済断交の制裁を受け、殆どの物資が手に入らなくなり世界の孤児となった日本は、その生存圏を南方諸島に拡大し、それらの地域対策及び海上輸送路の確保の為に太平洋諸島一帯に膨大な陸海軍を派遣し世界を相手に戦う事になったが、此の無謀な戦いは早くも破綻し始めていた。物量的に超大国である米国を主とする連合国の軍隊は、それらの島の日本軍に対して猛攻を開始しようとしていた。従って南太平洋諸島の防衛強化は緊急の最重要戦略であったが、今となつては南方経営と言うよりも、南の島々に送り込み孤立状態になりつつある何十万日本軍を殺戮・全滅から救う為でもあった。

南海第四守備隊の他、後日、中国戦線の部隊等も急遽転用された。そしてそれらの増援部隊は結果として徒に悲惨な犠牲の数を増やすだけであつたのである。

しかし我々には戦局の動静は全く判らない。大本営すら敗勢の認識が薄かつたのではないかと言われている。

とにかく南海第四守備隊はこうした任務を持って新設され、私は勇躍その第一大隊本部に参加したのである。第一大隊本部と二ヶ中隊が第六連隊内で編成されたが、大隊長は九州都城連隊から赴任してきた。

(一) 少佐と言つて煮ても焼いても食えぬ下士官上がりの老練な職業軍人で、私はこの大隊長と敗戦になるまで戦塵の中で起居を共にすることになるのである。それから暫くの間は動員部隊の編成作業に明け暮れし、多忙を極めた。

出動の日が差し迫っていたのと、機密保持の為外泊はゆるさなかったが、動員の命を受けた将校は営舎付近で家族との面会が黙認されたので、私は加古川の川原で父母・妹と、出陣前最後の面会をした。そしてかねて依頼していた戦場に持つて行く品々を受け取った。軍装した日本刀(銘・水田国重)・母が作ってくれた千人針・家族四人の写真等々。

もう生きて再び会えないかも知れぬと思うと別れ辛い面会だった。

別れる時に父母と一つの取り決めをした。

戦地に到着しても、軍の秘密保持上地名を葉書に書くことは許されないだろうから、葉書の中の意味の無い数字で経度・緯度を示すことにしておいた。